慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	坂田稔著『ユースカルチュア史：若者文化と若者意識』
Sub Title	Minoru Sakata, History of youth culture in Japan
Author	内山, 秀夫(Uchiyama, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1980
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.53, No.3 (1980. 3) ,p.157- 162
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19800315-0157

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

坂田　稔著
『ユースカルチュア史
――若者文化と若者意識――』

ユースカルチャー＝若者文化が突出したのは、何といつても〈青年の叛乱〉が世界大にくりひろげられた時であつた。それは確かに、太平洋戦争中に消耗品でしかなく、それでいて妙に国の大義に殉ずることがもてはやされた青年のはしくれにいた私には、まばゆいばかりの〈青年の現在〉であつた。青年であることは歴史にあつては瞬時であつても、ライフ・ヒストリイを自分史と読みかえれば、その瞬時がその人を創りだす。私には美しくもまた重い青年がそこにあつた。

しかしながら、彼ら青年には魔術としての正当性もなければ、自己同一化源もない。私にとつてはこの魔術からの自己解放、つまり大日本帝国からも場合によつては日本からも自己を解放するための対自化されるべき自己の在りかでありうるものを、彼らはまさに探し当てることからはじめねばならないにちがいない。へまをすれば、そのことは、自己を滅ぼすことにもなりうるし、また〈絶対の探究〉にもなりうる。そうだとすると、彼らの時代は何を次代に残し伝えるのだろう。そこに歴史の予定はありうるのだろうか。

本書はこうした課題にこたえるものではない。むしろ、幕末の志士からはじめてニューヤングまでの青年像を二〇の範疇に断裁した青年のたたずまいを通じての日本現代史になつている。つまり、もう一つの日本現代史だと言うべきであろう。そして著者は、この各範疇を十二、三頁に画一することで、自分の思い入れを除去している点では、あるいは読者にものたりなさを思わせるかもしれない。

しかし、前述したように自分は誰かに取りつく島がないかもしれない青年諸君には、案外この種の一風変つた整理が、とりつき島を与えるのじやないか、とも思えるのである。

※

「序　ユースカルチュアについて」は、社会心理学者としての著者が、青年文化論の理論とその歴史的意味を簡潔に書きとめた部分である。

著者は青年文化をどうとらえているか、つまりその独自性をどのように確認しているのか。著者は「青年層といえば、当然のことながら、全体社会に含まれた部分的集団であり、その点で彼らの生んだ文化は、全体文化に内包されるサブカルチュア（下位文化）である。それでいてなおユースカルチュアの存在を問題にする場合には、それが単に成人文化の小型版や未成熟段階のものではなく、成人文

化と非連続的な性質を持つものであること、また成人文化から与えられ、その体系に組み込まれるものでなく、独自の内容を持つものである」（一―二頁）と指摘する。

この非連続性（もちろん相対的にだが）に着眼した文脈での青年文化の独自性強調は、「青年期は文化的・社会的現象」（M・ミード）だとする点に重大性を認識した、その意味においてである。だからこそ、「一般的にいつて、原始社会から文明社会への発展は、青年期が次第に成人文化との連続性を切り離され、独自性を強めていく過程」（三頁）と読みかえられるのである。この過程が十九世紀に青年運動の噴出に顕在化したのは、〈十九世紀〉という転換期に必要な歴史創造エネルギー源という視角からとらえれば十分に首肯しうるだろう。A・コントが青年の進歩性を強調して社会革新の動力と定礎したことには、この歴史的背景と重大なかかわりがあつたはずである。

したがつて、「青年の進歩的性格は、社会の中で年齢集団と結びついたひとつの勢力をつくると同時に、新旧世代の意識・行動のギャップを際立たせ、青年は旧世代に追随する『若い成人』であることを拒否し、『若い』ということに力点を置いて、『成人』との連続性を断ち切り、人生という軸においても、青年期を明確にさせた」（五頁）との指摘が有意になる。

こうした青年文化の社会的意義は、しかしながら、現代にいたつてはじめて確定されることになる。つまり生産力の飛躍的増大、すなわち高度産業社会の形成による豊かさの社会環境の中で、よきにつけ悪しきにつけ、職業の専門化要請が高学歴社会を派生する。つまりは高等教育志向の一般化である。だが、こうした社会本質的要請は豊かな社会の現実にからめとられ、むしろ生産社会加入前の責任のない自由期として青年期が特長づけられる傾向が強くなる。（たとえば小此木啓吾のモラトリアム人間）

言いかえれば、「生産的価値に貫ぬかれた成人文化とは、かなり異質な青年文化」（十一頁）が形成される。と同時に、「今までの青年が文化の伝承について、そのほとんどを家庭・学校と地域社会から受けてきたのに対し、そこへ大きくマスコミが割込んで、文化伝承の型が変化したことも、青年文化が成人文化に統合されにくくなつた要因のひとつ」（十二頁）とおさえておくことも重大である。

だが依然として青年が社会の高生産力に依存していることは確かであり、その社会が成人社会であることに変わりはない。つまり、文化的にはかなりの自律性をもちながらも、そこでの必然的な依存関係を青年は思いしらねばならなくなる。「彼らのモラトリアムは、家族の経済生活に大きく依存し、かつそれを長引かせている。そこで青年たちは、自立意識の発達とともに、成人への依存から離脱し、その支配を拒否しようとする志向が強く働き、それでいて依存が断ち切れないでいることに、苛立たしい不満を感じている」からこそ、「青年文化の内側には、このような成人文化への攻撃性が隠されている」（十二頁）状況が常態になる。

この内なる攻撃性は、より求心的には、自己が期待する自己を実現するというアイデンティティの獲得に収斂する。そして、この自

己実現は、管理社会化された高度産業社会では、青年が自律的であろうとすればするほど困難になる。ヴァンデンベルグ流に言えば〈引き裂かれた人間・引き裂く社会〉のダイナミズムが人間に有利に作動することの保証はない。

著者はここで青年問題を解決することにむけるのではなく、H・セバルトの機能モデルによって、現在このままでの青年を見つめることに懸命に立ちつくす。「青年は家庭の情緒的依存や拘束から離脱するが、成人社会の中で満足し得る地位や役割がすぐさま与えられず、そればかりでなく、成人からの価値や権威のおしつけがあるなかで、彼らは青年集団乃至青年文化を防壁にして、そこに社会的所属感を得、安定感を獲得する。さらにここで新しい行動様式を学び、社会的な訓練を受け、自己実現の欲求を満足させる。」（十三―四頁）

結論的に言えば、下位文化としての青年文化が、たとえどのような形状であれ、自律的な文化的実体として意味をもつのは、社会の全体文化に内包されながらも、対抗的文化として内部的に緊張誘発因として作動し、全体文化の文化変容を常態としている点が重大である。このことは確実に〈変動の時代〉としての現代を社会科学的に理解し、歴史的に意味づける上で、さけることのできない視座としてわれわれにセット・インさるべきことがらなのである。

※　※　※

本書の本論とも言うべき青年文化類型として抽出されているのは、前述のごとく二〇のそれである。すなわち、幕末の志士・開化の書生・民権壮士・ハイカラ・帝国学生・煩悶青年・大正青年・市民青年・田舎青年・マルクスボーイ・モボモガ・青年将校・特攻隊・アプレゲール・六三制っ子・太陽族・現代っ子・新左翼・ヤング・ニューヤングである。おそらく、この類型化について異議をとなえる者も多いだろう。さらに第二次大戦前と後での類型化の差を問題にする者もあろう。

確かに著者の青年文化類型は厳密な考証に耐えられない側面をもつている。この点は著者も「時代によるユースカルチュアを描き分けようとして、何やら牽強付会な書き方をしたり、便利な抽象概念で十把一からげにくくるようなやり方になつてしまつた」（三一四頁）と気づいておられる。だがこの種の批判は、案外、青年文化を史的に構成しようとすることの、前述したようにもう一つの歴史への抱負の芽をつんでしまいかねないことを知らねばならないのだ。したがつて私には、この著書をそのままに興味深く読むことが何より大切だつた、と述懐したい。

※　※　※

戦前の青年文化を特長づけるものを〈維新〉のそれと見ておけるだろう。維新が王政復古でないことの意味を考えておくべきである。たとえばテツオ・ナジタ教授が「維新の意味は、少なくとも欧米の歴史学で用いられている言葉としてのrestorationには、ほとんどふくまれていない。……『維新』という言葉にふくまれている、

まつたく新しい方向に向かつて踏み出すという意味は、欠けているのである」（『明治維新の遺産』中公新書、「序文」）が指摘するように、そこには進歩とか成長といつた、歴史の起点に立つという、明らかに意思的営為の情況がふくまれているのである。明治維新・大正維新・昭和維新。そこでの〈維新観〉が青年文化を貫通する。

したがつて「青年がおとなになつたら時代をつくる」というメタファー含みの「青年が時代をつくる」といつた将来への期待はそこには排除されている。つまり「近代国家への移行期におこつた時代の疾風怒濤性が、そこに生きる青年に、今までになかつた青年期を付与した」（十八頁）点をカウントしておかねばならない。この新〈青年〉の登場が、啓蒙思想による自己解放をバネとしつつ、書生・学生文化につながつてゆく。文明開化はしかし、「有司専制」の中で、国家との直接的結びつきとしての立身出世主義の社会思想的基盤が崩壊するにしたがい、民権壮士のハイカラ化に道をゆずることになる。その傾向を時代的に確定したのが、著者の言う「帝国学生」であつただろう。つまり明治国家体制の確立がそれである。ここにはすでに「維新」の精神はない。逆に学生らしく・青年らしくといつた知足安分の「らしくモラル」が、「体制を整えた日本国家の中で、学生や青年の役割とは将来国家の有為な人材になる時期であると定義し、そのために誇りや義務感を持つて、成人とは一線を画す禁欲的な規範を要求した」（八四頁）のであつた。

国家秩序が固定化することは、青年の社会的役割を固着化することを要求する。それは秩序を批判的対象とした青年のエネルギーの溢出をおさえるところに照準される。つまりは、青年の文化価値的対象を個別的自己の内奥に求心させ、社会へと遠心させない方途でもあつた。〈修養〉主義がそれであつた。だがこの求心と遠心のベクトルが人間に歴史創造への主体的力学を機能させるのであつてみれば、自己閉塞の個人化としての個人主義や自己主義が何らかの形で破滅しないわけにはゆかない。〈煩悶〉はその自転空転のゆき場のない力学として逃避への道を用意する。かくて明治は歴史をとざした形で大正に移行していつたのである。その明治を清算したのが〈大正青年〉であつた。

彼らは「国家の中に組み入れた明治人ではなく、また市民社会の中で調和をとり得た大正人でもない。転換期社会の間隙から生まれた異種の世代としての特異性を多分に持つていた」（一一六頁）のであつた。この特異性は大正教養主義として自己完成に、つまり主観にむけられた生き方に顕現する。したがつて、その視座は国家から離脱する個人主義と国際主義のダイナミズムを内包することで昂揚するものをもつている。だかこの昂揚は、相対的安定期としての大正の調和性にいろどられていることを忘れてはなるまい。したがつて、「社会主義、ファシズム、モダニズムという三つの方向に分裂の様相を濃くしていく」（一三〇頁）萌芽を、この多面性の中の調和はすでに予兆していると言うべきである。著者の展望はよくこれを言い当てている。

「歴史の発展段階から見ても、大正期は外来文化の模倣から内面化の時代に移り、国民の一部ではあるが、都市新中間層を中

心に、典型的な市民社会が成立し、教養主義はそこに花開いたのである。そうして模倣から内面化の時期にはいつた青年が、歴史と同じ形の過程を持つことになる。しかし大正の相対的安定期が短く、市民社会の基盤がもろかつたように、大正の教養主義も昭和の激動の中に崩れていくが、その精神的スタイルは長く学生の間に残り、第二次大戦後の一時期まで続く。」（一三一頁）

昭和は金融恐慌にはじまると言つてもよい。それは相対的安定の脆弱性をものの見事にくつがえした。すなわち、安定の中に潜んでいた歴史的事実が一挙に社会問題として噴出したのである。現状打開を叫ぶ社会主義は、他方でのファシズムをも誘発する。しかも社会主義が合法的に大衆の支持をうるにいたるまえに、現状打破の革新ファシズムに取って替わられる。青年将校がその担い手であつた。大正右翼世代が彼らに教えたのは、「日本という国家が天皇を最高絶対の権威として成り立つていること、天皇大権によるクーデターによつて既成の状況を一切清算しうること、君臣一体の階級なき社会をつくること」（一八五頁）であつた。

しかし、こうしたラディカリズムは青年の心情を操作する国家・軍部統制に吸収され、天皇制の制度的支持基盤に再構築されることで、青年を国家的に無害化する。維新主義としての心情ファシズムは、超国家主義の燃料として体制化され、十五年戦争をたたかう力に変質する。

おわりに

しからば戦後はどうか。文明論的に言えば、青年文化は一方では風俗を形成しながら、日本的文化を外むけにすることで土着性を揺り動かしているかのようである。しかし、新左翼が内発性を強調し人間的連帯に生きようとしたところで、逆に日本に回帰する方向を発揮したところに、日本のもつ文化的に特異な精神状況の持続が見られる。

たしかに、戦後世界は小さくなつた。つまり運輸・通信における技術革命がわれわれを拡大したと言つてよい。そのことは、青年文化を地球大に拡大すると共に、文化的相互浸透を加速している。つまりは、われわれとてすでに「世界」史から免れえない、ということを人間的な事実として認識しなければならないのである。

さらに青年文化の一つの核である学生が、士族学生→国民学生→市民学生→大衆学生というように変質していると見れば、大衆文化の中に青年文化が埋没してしまう現実もある。その大衆性は、世界に開かれた国家の中にあつて世界中の問題状況を、あるいは個別的に、そして総合的に「現代」として認識し、それを打開するための創造的な文化核になりうるのだろうか。脱工業化社会への道にある日本を、日常的に、だからこそ歴史的にとらえ切る風土としての青年文化が果してひらけるのだろうか。著者は〈ニューヤング〉にそれを認めている。

青年が何かを身につけたとき、それは彼のライフスタイルを変え

るか変えないか、については多くの論議がある。変えるところに賭けていなければならないことは、成人のいのちでもある。それならば、われわれ成人が地だんだふんでいるところだけは見ていてくれ、と思いたい。

本書は前述したように、取りかかる手がかりを青年に与えうるところと、われわれ成人に、われわれの過去と現在を思い透すところを示唆するところ大なり、として私の関心をそそった労作であった。ただ東大新人会の機関誌名を再版時に『デモクラシイ』と訂正されることを望みたい。（一五五および三三七頁）

（四六版・三七一頁・勁草書房刊・二〇〇〇円）

（一九七九・十二・十五）

内山秀夫